

秋風しゅうふうの引いん

劉りゅう

禹う

錫しやく

何いずれの処ところよりか
秋風しゅうふう至いたる

蕭蕭しやうしやうとして雁群がんぐんを送おくる

朝来ちやうらい庭樹ていじゆに入いつて

孤客こきゃく最も先さきに聞きく

【作者】劉禹錫(七七二〜八四二年)中唐の詩人。中山(河北省定県)の人、一説に彭城(江蘇省銅山県)の人。字、夢得(ぼうとく)。七九三年

進士に及第。やがて監察御史となり、王叔文、柳宗元らと政治改革を志したが、八〇五年叔文は失脚、禹錫は朗州司馬に左遷された。十年のち都へ召還されたが、そのときつくった詩をとがめられて再び連州刺史に移され、八二八年に都に戻つて主客郎中となった。その後も中央と地方の諸官を歴任して没した。地方にある間に民間歌謡に接し、農民の生活や感情をうたい、『竹枝詞』『柳枝詞』などは唐詩の新生面を開いたものであり、地方で広く歌われたという。また、晩年は白居易と親交があり、唱和した詩も多く、ひたすら詩文の道に励んだ。

【語釈】*秋風引…秋風の歌。 *何處…どこ(からか) *蕭蕭…もの寂しげなさま *朝来…朝方から。夜明けから。 *入庭樹…庭の木

に吹きかけてきた。 *孤客…一人旅の人。

【通釈】どこからか、秋風が吹いて来た。もの寂しげに去つてゆくガンの群れに向かつて吹いている。

朝から庭ささぎの木に吹いてきたのを、一人旅をしている(余儀なくして、無聊であつて、鋭敏になっている)わたしが一番先に聞きつけた。